

タイトル: 七年後のある朝の出来事 著者名: peanuts.

一、おわり

統合失調症妄想型。陽性症状(幻覚・妄想)が主体で、30代以降に発病する人が多い。抗精神病薬がある程度有効とされている病気である。

36歳のとき、私はこの病気を発症した。

職場の同僚が私の悪口を言い、仲間外れにする。原因は見当もつかない。同僚からの度重なる攻撃に悩んだ末、私は上司に相談をした。しかし、私が悩んでいるような人間関係は存在しないと上司は私に説明した。

上司も同僚と仲間(グル)だ。

上司と同僚からの度重なる攻撃に、行き場のない悩みをいただき続けていたある日の朝、私はベッドから起き上がることができなくなっていた。

「どこにも異常はみつきりません。」

かかりつけの内科医からそう言われ、その後は様々な診療科を転々とした。現在も通院している精神科にたどり着いたのは、それから一年後のことだった。

二、荒野で

仕事を辞め、人間を避け、精神科への通院の日以外は外出しないひきこもり生活を続けて六年後。窓の外を眺めると、かわいい小鳥たちが無邪気に手招きをしてきた。

「外の世界は楽しいよ。」

私の居場所は地球上にこの部屋しか存在しない。外には人間がいる。人間は私を攻撃してくる。

怖い。

そんな恐怖から、私は何を見聞きしても何の感情を示さない人形になった。そして、私は何のために生まれてきたのか、そもそも命とは何なのか疑問に思うようになっていた。人形になった私はどこへ行って消えるのだろうか。それは群れからはぐれた一匹の子羊が、漆黒の荒野で明けない夜に怯えながら淡々と時を重ねる虚無感に似ていた。

神様はいるのだろうか。

偏差値だけで入学した学校で買わされた聖書が本棚の肥やしと化しているのを見た。私はそれを手に取り、表紙をめくった。

三、創世記

制服の内ポケットに忍ばせた MD が奏でる安室奈美恵の曲がつまらない授業を癒していた。受験に失敗し、入学した学校は心のキズの象徴だったあの頃。ルーズソックスで心のキズを隠し、素直になれなかったあの時。

聖書。

私が負けた証だった。

四、はじまり

誰も攻撃しない聖書の世界に入り込んだ人形の私は人間に生まれ変わっていた。笑って、そして泣いていた。

聖書。

私の生きる証になった。

アスファルトの割れ目で疑うこともなく懸命に生きるハルジオンのように、聖書から命の光が真っ直ぐ神様に向かって輝いていた。

裏表紙を閉じたとき、夜明けが訪れた。窓の外を眺めると、かわいい小鳥たちが無邪気に手招きをしてきた。

「外の世界は楽しいよ。」

スニーカーを履いた私をやさしい風がそっと抱きしめた。

七年後のある朝の出来事。